

# 歴史・文化の薫るかわへの取り組み

三重県 伊勢市 まちづくり推進部 まちづくり推進課 地域振興係 奥野 寛

## 1. はじめに（勢田川と周辺の歴史）

勢田川は伊勢市の中心部を流れる全長6.9km、流域18.4km<sup>2</sup>の比較的小さい河川ですが、伊勢の経済、生活の歴史、文化を見るとき重要な河川です。

河口の大湊をはじめ神社（かみやしろ）港、一色町、通町、二軒茶屋、河崎と特色ある地域が、勢田川沿いにはあります。

大湊は古くから造船業で栄え、豊臣秀吉が朝鮮出兵の際の旗艦「日本丸」（元は、九鬼水軍の「鬼宿丸」）をはじめ、歴史の上でも著名な船を多数建造しています。

つづく神社港は、万治年間（1658～61）に港が開かれたといわれ、以後、海の玄関口として大いに賑わった港です。明治時代に伊勢湾に定期船が開かれてからは、各地からの参宮客が殺到し黄金時代を迎え、大いに栄えました。

次に、一色町、通町には南北朝時代に伊勢の国司である北畠氏や神宮から保護を受けていた、伊勢三座のうち二座の能が継承され、中でも「翁」は国の民俗無形文化財に指定されています。

また、二軒茶屋は、かつてうどん屋と餅屋の2軒の茶屋があったことから名付けられたといわれており、天正年間（1573～92）創業の二軒茶屋餅本店は



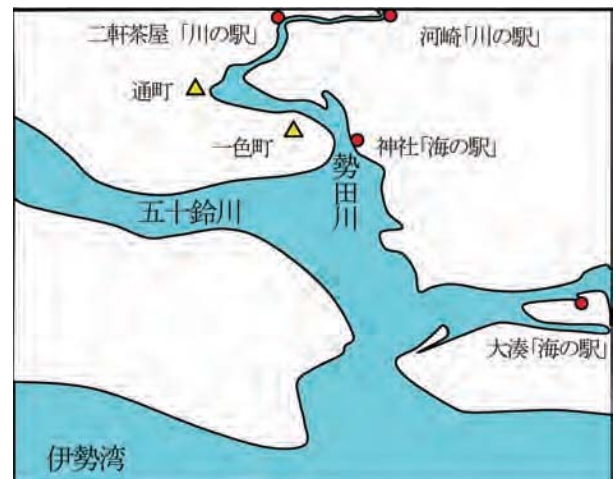
写真－2 環濠跡（河崎）

かつての茶屋風情を今も伝えていています。ここは、内宮・外宮の両方へ近いということで、尾張・三河・遠州方面から神社をへて、勢田川をさかのぼってくる船参宮の上陸地として栄えました。明治5年（1872）に、明治天皇がはじめて海路にて来勢・神宮参拝された時は、ここ二軒茶屋に上陸され、それを記念した碑が建てられています。

河崎においては、戦国時代初期（1487年ごろ）に地元の豪士・河崎宗次が領有し、防衛のため惣門（そうもん）と環濠（かんごう）を備えた町として伝えられています。現在ではその多くは暗渠化してい



写真－1 勢田川周辺航空写真（右図とリンク）



図－1 「海の駅」「川の駅」等の位置関係

ますが、一部にその痕跡を見ることができます（写真－2）。また、16世紀に入ると、伊勢神宮鳥居前町の山田（外宮を中心とした地区）・宇治（内宮を中心とした地区）へ生活物資を運ぶために、町の中心を流れる勢田川を利用した船による水上輸送と河崎から物資を荷揚げして、人馬で山田・宇治へ送る陸上輸送を仲介する川の港となりました。

その後、江戸時代には「おかげ参り」の参宮客に物資を供給する問屋街として成長し、山田奉行より伊勢神宮周辺地域の米と魚の卸売り専売権を認められ、よりいっそう繁栄し「伊勢の台所」として全国的にも著名な商人町になりました。

当時の川沿いの景観を偲ばせる風景として、川から直接荷物が出し入れできるように設けられた入口が、堤防越しにですが今でも河崎の一部で見ることができます。（写真－3）



写真－3 土蔵の川側入口（河崎）

## 2. 伊勢のまちを襲った七夕災害

昭和49年（1974年）7月7日、梅雨前線に台風8号が影響し、伊勢周辺を集中豪雨が襲いました。このときの雨の強さは、日雨量407mm、時間雨量61.5mmというもので、この豪雨により勢田川は氾濫し市街地の大半が浸水しました（浸水家屋数13,060戸、被害総額184億円）。

昭和50年（1975年）に勢田川が1級河川の指定を受け建設大臣管理区間となり、翌年の昭和51年（1976年）には「直轄河川激甚災害対策特別緊急事業制度」が創設され、この制度の1号として適用を受け、勢

田川改修計画が発表されました。この計画は、231戸もの家屋の移転を要する計画でした。

## 3. 改修計画反対運動からはじまった保存運動

建設省による、河川拡幅を主な目的とし、多くの立ち退きを伴う勢田川改修計画に対して、住民の反対運動が起こりました。

また、河崎を訪れる人々から、河崎の町なみの素晴らしさを指摘され、河崎における町なみの保存運動の気運がさらに盛り上がりました。

そして、昭和54年（1979年）には地元住民によって「伊勢河崎の歴史と文化を育てる会」が結成され、町なみの調査を実施し報告書を作成するなど、町なみを保存していくために様々な活動が進められてきました。活動を開始した当初は行政との対立の関係でしたが、その後は協調、さらに協働と、歩調を合わせてまちづくりをするようになりました。

前出の指摘された素晴らしい町なみは、河崎の勢田川に平行に走る通り沿いに、河崎やおはらい町の町なみの特徴である切妻・妻入りづくりの、町屋や蔵に見られます。（写真－3、－4）。



写真－4 川沿いに残る切妻の町なみ（河崎）

## 4. 歴史・文化を背景にした取り組み

### （1）河崎の町なみ保全とまちづくり

平成9年（1997年）に市民参加型による「都市マスタープラン」が公表され、その中で河崎を「歴史文化交流拠点」に、また勢田川を「歴史観光交流軸」として位置づけられました。これがきっかけとなり、

平成11年（1999年）に、取り壊しが予定されていた河崎の代表的旧商家の土地を市が購入し、また、建物は寄贈を受けて修復を行ない、保存されました。現在、「伊勢河崎商人館」として「NPO法人伊勢河崎まちづくり衆」により管理運営され、新たなまちづくりの拠点として活用されています。

また、地元の有志住民によって「環境整備方針」や「景観ガイドライン」の策定を進めており、現在、案が作成されていますが、付近住民の生活を損なうことなく、理解を得ながら、町なみを保存していくように、会議を重ねています。

「方針」や「ガイドライン」は未完成ながらも、この地区に出される店は既存の町屋や蔵を利用した景観に配慮したものも増え、またNPO法人が実施主体の「川辺のまちなみづくり」事業にて、川沿いでの一坪市やフリーマーケットが平成16年度から開催されています。さらには勢田川を意識したイベント（写真－5、沿川数kmにわたり、自治会の枠を超え開催）が、地区住民の手によって昨年（今年）8月（今年）12日に開催されるなど、反対運動からはじまった保存運動がまちづくりへとつながり、多くの地域の方々に河崎の町なみを大切にする気運が根づいてきているように思われます。

## （2）造船技術の伝承と船参宮の再現

「伊勢地域活性化に資する木造船建造・技術伝承事業」として、伊勢の歴史ある木造船の復元とその造船技術を保存・伝承していくため、平成15、16年度



写真－5 イベント「勢田川を灯りの川に」  
川沿いにキャンドルを並べて演奏会などの催し

に日本財団の助成を受け、木造船を建造しました。このとき、複数のNPOの方や、市民の方々にワークショップに参加いただき、運航ルートや木造船の活用方法、「海の駅・川の駅」の設置について話し合いが行なわれ、復元のために留めませんでした。

そして、復元された木造船（写真－6）は、

「舟遊び かのみやびとの それにて  
みずき いぎなう 神います社」  
（詠人不知）

の詩に由来して、「みずき」と名づけられ、現在「NPO法人神社みなとまち再生グループ」による運航のもと、市内4箇所の「海の駅・川の駅」（図－1（位置関係）および写真－7）間を毎週土曜、日曜日の定期運航および貸切運航を行なっています。さらに、神社「海の駅」においては、中部国際空港との間で高速船「伊勢1号」の運航を行なっており、「みずき」と併せてかつての船参宮を再現しています。

なお、4つの駅のうち3箇所については、三重県の補助事業である「宮川流域ルネッサンスエコミュージアム整備事業」によって、平成14年から平成17年までに、既存の階段堤防を利用したり、古い土蔵を再生利用した駅舎や係留施設の整備がされました。

また、河崎「川の駅」周辺の階段護岸については、平成12年度に国土交通省三重河川国道事務所により整備されています。



写真－6 「海の駅」「川の駅」間を周航する  
木造船「みずき」

この他、勢田川で船が使われる行事には、毎年5月に開催される「どんどこ祭り」(かつての船参宮の際、鐘や太鼓を鳴らしながら賑やかにやってきた人たちをどんどこさんと呼んだことから、この人たちの風情をテーマに、約20年前に民間有志により始められ、親交の深い愛知県常滑市の関係者を招いて開催)や「御幣(おんべ)鯛船の歓送迎式」(愛知県の篠島から伊勢神宮(内宮)へ干鯛(おんべ鯛)を奉納する行事で、平成10年に70年ぶりに復活、神社港がその受け入れ港になっています)があります。



写真-7 二軒茶屋「川の駅」

### (3) かつての綺麗な勢田川への取り組み

このように、伊勢の歴史や生活に深くかかわりのある勢田川ですが、生活様式の変化に伴って水質が悪化し、平成10年から平成17年の8年連続で県内ワースト1の水質という不名誉な一面もあります。その原因の1つとして、勢田川流域に市内人口の約半分が集中し、汚れの原因の約80%が家庭からの排水によることが挙げられます。

そんな勢田川も、かつては子供達が泳いだり水遊びをするような川でした。そのような、かつての勢田川を取り戻そうと、様々な団体等が活動を行っています。

『勢田川を天の川に』を合言葉に、沿岸自治会や国



写真-8 七夕清掃の様子

県市も所属する協議会が主催する「七夕大そうじ」(写真-8)が、毎年7月の第1日曜日に行なわれています。この活動は、平成8年(1996年)からはじめられ、今年で11回目の実施となりますが、61団体の協力のもと勢田川およびその支川を含めた延長約11kmの区間で、約2800人の方たちにボランティアで参加していただき、清掃作業をしていただくまでになっています。

また、前述の「NPO法人伊勢河崎まちづくり衆」によって、勢田川パトロールとして船による巡回と清掃をしていただいたり、EM(有用微生物群)菌を川や排水路へ投入したり、各家庭で使用することにより川の汚れをなくそうとする取組みなどにより、一定の効果は得ています。

## 5. 最後に

勢田川改修計画をはじめ、今回挙げた取り組みで共通して感じさせられることは、住民主体、地元住民との連携による取り組みの大切さです。

『勢田川』という共通の認識を軸として、歴史的町なみの保全や、伝統的行事の伝承、あるいはかつての環境を取り戻すために一つの目標を立て、自治会の枠を超えて住民が一体となり、主体性を持ち連携して取り組んだため、一定の結果が得られ、それが次の活動へとつながっているのだと思います。